

もくじ

- P.1 国際社会福祉協議会北東アジア (NEA) 地域会議 2021
P.5 アジアのソーシャルワーカーとの日々
P.6 2020 年度修了生福祉活動助成事業報告②
P.8 国際交流・支援活動にご協力ください ほか

国際社会福祉協議会 (ICSW) 北東アジア (NEA) 地域会議 2021

2021年11月9日、国際社会福祉協議会北東アジア (NEA) 地域会議をオンラインで開催いたしました。海外53名、日本国内88名、計141名にご参加いただきました。本会議は、国際社協の北東アジア地域に加盟する5つの国・地域 (韓国、台湾、香港、モンゴル、日本) が参加する会議で、2021年度は日本での初の開催となりました。「誰ひとり取り残さない包摂的な福祉コミュニティの形成 ~ after コロナを見据えて」というテーマのもと、コロナ禍で分断された人と社会を再構築し、with コロナ、after コロナの状況下で包摂性ある福祉コミュニティを形成するための政策的な動向と社会福祉実践についてレポートが行われ、社会福祉関係者どうしの情報共有を図りました。会議の概要をご報告いたします。

開会挨拶

全国社会福祉協議会 清家 篤 会長 (日本)



新型コロナパンデミックにより、人びとの暮らしや雇用の課題が顕在化しました。感染予防対策を加速させるとともに、生活課題を抱え、社会的に孤立した状況にある人を取り残すことなく支援をはかり、ディーセント・ライフ (尊厳ある人間らしい暮らし) と社会参加につなげていくための包摂的な社会の構築に取り組むことが必要です。それは誰一人取り残さない社会を実現するというSDGsの理念に沿うものです。その実現には、社会福祉関係者、行政、地域コミュニティの理解と協力、創意工夫をもって、地域の特性を生かした福祉コミュニティを形成していく取り組みが重要です。包摂的な福祉コミュニティの形成という共通の目標に向けて、今回の地域会議において各国/地域の課題と方向性を共有することは、大変意義深く思います。

北東アジア地域 ジョイス・イェン・フェン 会長 (台湾)



今回の地域会議の主催者である全国社会福祉協議会には、今日まで各国と連携を図りながら会議を取りまとめでいただき、感謝申し上げます。世界中の国ぐにと同じように、北東アジア地域のメンバーも、多くの社会経済的課題に直面しています。パンデミック終息の兆しが未だ見えない中、社会福祉も厳しい状態が続いています。革新的な解決策を見つけるために、世界で連携して国際協力することが現在求められています。このような時期に地域会議を行なうことは、誰も取り残さない包摂的な福祉コミュニティの実現のためにとってもタイムリーであり、多くの情報や経験を共有でき、お互いの励みとなるでしょう。実際に会えないことが残念ですが、今回このような形でも会議を持てることは、我々の長期にわたる良き関係が北東アジア地域にあることの証と言えるでしょう。会議の成功、皆様の健康、そして直接お会いできる日が近いことを願っています。

国際社会福祉協議会 ス・サンモク 会長 (韓国)



アフターコロナの世界においては、様々な社会福祉の課題が浮かび上がってきます。それらについて議論していくことが非常に重要です。コロナによって社会そして経済のデジタル技術の変革が急速に進んでおり、対面を必要としないサービスや社会福祉サービスにおけるデジタル化など、これまでと違う社会福祉サービスが望まれています。コロナの問題は一人だけの問題ではありません。社会福祉コミュニティにおけるメンバー同士のさらなる連携が望まれます。同様の社会的文化をもつこの北東アジア地域内での情報交換、経験や知識の共有が、新たな社会福祉サービス制度構築の助けとなるでしょう。

基調講演



広井良典氏（京都大学こころの未来研究センター 教授）
「持続可能な福祉社会のビジョン——after コロナを見据えて」

新型コロナパンデミックをめぐる問題は、それ自体が大きなテーマであると同時に、地球環境の問題、格差や貧困の問題、人びとの孤立の問題など、様々な問題と深く関係しています。

たとえば、感染の広がりには無数の要因が関係していますが、重要と思われる点の一つは格差や貧困、それと関連する社会保障制度です。格差や貧困が大きい社会では、劣悪な衛生環境そしてクラスターが発生し、感染症が社会全体に広がっていきます。新型コロナ感染症のようなパンデミックの発生を抑制するには、格差や貧困を減らしていくことが、有効な対策の一つです。格差や貧困の度合いは、その国の社会保障あるいは福祉制度と大きく関係しているため、社会保障や福祉の重要性を共通認識にすることが求められています。

日本社会の持続可能性について、AIを活用したシミュレーションでは、東京一極集中に示されるような「都市集中型」ではなく「地方分散型」が望ましいという結果が示されました。それは空間的な「分散」にとどまらず、働き方や住まい方、ライフスタイルの全体を含む、いわば“包括的な意味での「分散型」社会”への移行が、after コロナにおける持続可能な社会の実現にとって重要です。

近世までの日本には、病気や災害などに備えて人々が日頃からお金を出し合い、病気や災害に遭った者がそれを使うという「講」と呼ばれる仕組みが存在していました。このような相互扶助の考えの根底には、すべてが普遍的な天つり自然から、分け隔てなく恵みを受けるという「自然」を重視する思想があります。「相互扶助」や「自然」の重視はアジアの伝統的な理念や自然観とつながり、アジアの人々がなお共有している考え方、そしてSDGsの理念にもつながる内容ではないでしょうか。経済を大きくすることが目標となり、全てを“損得”や利益の追求で判断するような傾向が強まった現代において、今こそ福祉思想の再構築を考えるべき時代になっています。

これからの時代に目指されるべき社会像として「持続可能な福祉社会」という理念を提案します。「福祉」は富の分配の公正や個人の生活保障に関わるものであり、「環境」は資源や地球

環境の持続可能性に関するものです。「持続可能な福祉社会」とは、「個人の生活保障や分配の公正が実現されつつ、それが環境・資源制約とも調和しながら長期にわたって存続できるような社会」を意味します。福祉あるいは平等や格差の問題に関してパフォーマンスの良い国々は、環境においてもパフォーマンスが良好であることが示されています。人びとの間の相互扶助や連帯の意識が深く浸透している社会においては、環境を無視してまで経済規模を拡大しなくても、一定の平等や生活の質が実現されるからです。これからの時代において、アジアの国や地域が本会議のように交流し、また連携し合いながら、そうした「持続可能な福祉社会」をローカル、ナショナル、リージョナルなレベルで実現していくことが何より重要ではないかと思います。



政策レポート「包摂性を備えた福祉のまちづくり」

台湾



リー・リーフェン氏 / Ms. LEE Li-Feng (台湾保健福祉省 副大臣)

「台湾の社会福祉システムへの
新型コロナウイルスパンデミックによる影響と対策」

台湾における新型コロナウイルスパンデミックによる社会福祉制度への影響は、介護サービスの停止、DVリスクの増加、経済的に厳しい個人や家庭への打撃、社会福祉団体の困難への直面、社会福祉事業者の感染リスク増加が挙げられます。

介護サービスへの取り組みとして、政府はサービス利用者や一人暮らしの高齢者に毎日状況確認を行い、健康面でのニーズを把握するよう指示しました。また、地方自治体がニーズに応じて方針を変更できるよう許可、民間企業のリソースを活用した緊急対策の支援などを行いました。

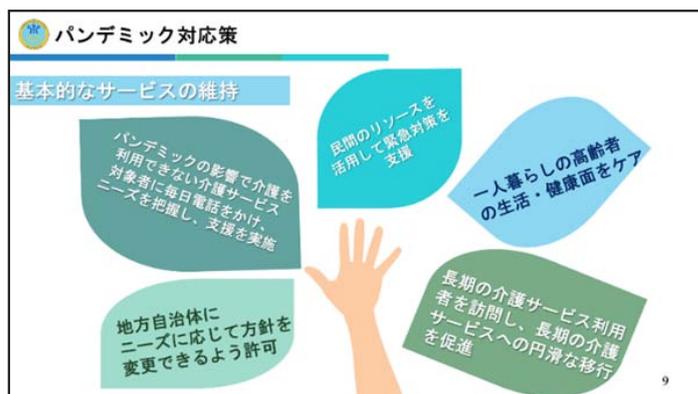
DV防止の取り組みとしては、電話やチャットなどDV被害者が助けを求めるチャンネルの拡充、店舗と連携した通報窓口の提供、被害者が安全に遠隔地から裁判所に出廷できるような支援、サービスの利用しやすさの向上に取り組まれました。DVの監視・分析のため、データ収集を継続し、今後の迅速な対応に向け、定期的な比較を行っています。

経済対策としては、規制の遵守を高めるため、隔離のため働けない人や、隔離中の人を世話する人に補償金を支給しました。また、12歳未満の子どもの保護者、既に補助金を受給している高齢者、子ども、若者、障害者にも補助金を支給し、生活の安定を図りました。その他、サービス提供者・NGOを支援するために補助金の受給資格を定めました。

社会福祉事業者の感染を防ぐことが、台湾のパンデミック防

止・規制対策の主眼となっています。ニーズ把握のため対面訪問が必要な場合は、保護対策を遵守し、滞在時間を最小限に抑えました。また、社会福祉関係者のワクチン接種を優先的に行うように努めました。

今後も引き続き、パンデミック防止・規制方針や指示を遵守し、パンデミック時の社会福祉サービス提供モデルを拡充していきます。また、社会福祉サービスのキャパシティと社会福祉団体や施設の運営を維持し、サービス利用者のニーズとサービス提供者の権利のバランスを取りながら、全ての人々の安全を確保していきます。



その他のスピーカ



韓国

チョン・ムソン氏
(崇実大学校 社会福祉学部 教授)
「ポストコロナ時代における
福祉コミュニティの構築」



モンゴル

バチュルーン・スフオチル氏
(ウランバートル国際大学
ソーシャルワーク学部長)
「モンゴルにおけるソーシャルワーク
育成政策の必要性」



香港

アンソニー・ウォン氏
(香港社会服务联会 事業責任者)
「COVID-19パンデミックがもたらす
新たな課題と新たな機会：
香港からの新たな知見」



日本

中島 修氏
(文京学院大学人間学部
人間福祉学科 教授)
「日本における地域福祉の動向」
セミナーモデレータを兼任

実践レポート「コロナ禍の対応の実際」

香港



ボスコ・ン氏 / Mr. Bosco NG (WEDO Global 設立者、ディレクター)
「香港の少数民族コミュニティをつなぐ革新的なアプローチ」

WEDO GLOBAL は、香港における多文化教育の提唱、文化的多様性と社会的包摂の推進を目的に 2011 年に設立されました。様々な文化的背景を持つ人々を「文化大使」とし、文化の架け橋を築いています。パンデミック期間中、感染対策用品や生活必需品を必要としている地域の住民、特に草の根の少数民族の住民にアプローチしました。配布を通じて住民と交流する中で、多くの人々がパンデミックにより失業したり、勤務時間を減らされていることがわかりました。

そこで、2020 年 5 月に「We Mask Action」という布マスクを共同で企画・開発するプロジェクトを立ち上げました。このプロジェクトは、草の根の少数民族の人たちにトレーニングを行い、女性や若者に「縫い物大使」になってもらうことが目的です。多くの伝統衣装は香港で購入するのが難しく自宅で縫う人が多いため、彼らは裁縫の技術を持っており、それが彼らの社会貢献のチャンスとなりました。「1 枚購入につき 1 枚寄付」方式により、5,000 枚以上の布マスクと感染対策用品を、草の根コミュニティの住民、少数民族の家庭や高齢者に配布しました。プロジェクト参加者は、香港の社会の一員だと感じられるだけでなく、社会に貢献できて幸せを感じられるようになりました。

WEDO GLOBAL の使命は、誰も取りこぼさない社会をつくることです。少数民族の女性や若者の問題のほかに、パンデミックの影響を受けた人など多様な人のためのプロジェクトを実施し

ました。学校に行けないため現地語である広東語を使う機会が減った子どもへの広東語習得支援、人と会う機会が減った高齢者へ Zoom の使い方ワークショップ、地元の中国系の子どもたちへ絵本による多文化教育などです。

パンデミックは、私たちの生活や社会に多くの課題をもたらしたかもしれませんが、しかし同時に、チャンスも生まれています。情熱を持って、コミュニティの住民が何を必要としているのか理解し、ステークホルダーと議論、連携しながら、革新的なアイデアを生み出そうと取り組むことで、社会をよりよい形で支えることができると考えています。香港にとどまらずアジア太平洋地域で、具体的な協働活動を進めて、世界をともに支えていきましょう。



その他のスピーカ



韓国

イ・ソンヒ氏
(チョンガム高齢者福祉財団 理事長)
「コロナ対応事例」



モンゴル

スフバートル・ハンドマー氏
(モンゴル国立医科大学公衆衛生学部
社会福祉学科 教授)

「モンゴルにおけるソーシャル
ワーカーのキャリア開発：
課題と機会」



台湾

リ・ジアティン氏
(台湾ホームレス協会 ソーシャルワーカー)
「台北のホームレスの人びとへの
新型コロナウイルスの影響」



日本

小山 泰明氏
(立川市社会福祉協議会 地域活動推進課
経営総務係主任)

「市区町村社会福祉協議会に
おけるコロナ禍の取り組み」

※各国レポートの動画を公開しています。
(2022 年 1 月末まで)



アジアのソーシャルワーカーとの日々



森川 蓉子

社会福祉法人 天竜厚生会
地域福祉事業部 福祉サービス課 ソーシャルワーカー

「アジア研修生が教えてくれること」

研修生受け入れの始まり

天竜厚生会では第1期からアジア社会福祉従事者研修生の受け入れを開始し、これまでにアジア8か国から延べ36名の研修生を受け入れてきました。研修が開始した当時の事務局長であった山村三郎氏の「研修生に日本の福祉を教えるというより、むしろ福祉の原点・法人の原点を彼らから職員が学んでほしい」その思いから受け入れが始まりました。

さらに研修生のなかには食事や生活習慣が私たちと異なる方もいますが、その彼らがもっている文化を受け止め、お互いを尊重し合える関係を築くことを当法人は大切にしています。

受け入れ担当として感じたこと

研修生を一番近くからサポートする立場として強く感じたことは、研修生が確固たる信念を持ち研修に臨んでいることです。母国の福祉について真摯に向き合い、母国の福祉事情を踏まえながら日本の福祉事業との違いや特徴をもち帰り母国の福祉向上に役立てたいとの強い意志を感じます。また、研修生が各施設で実習中も常に勉強を欠かさない姿勢、自身が疑問に感じることを積極的に質問し、時には私たちの気づかない視点に切り込み改善策を提案する姿勢にはとても感心しました。

異国の慣れない環境のなかで様々なことに挑戦し、新たな学びをつかみ取ろうとする研修生の意欲を目の当たりにした多くの職員が自分たちの仕事や福祉に対する姿勢を改め

て見つめなおす貴重な機会となっています。

研修生とのつながり

当法人では「天竜厚生会スタディツアー」と題し海外における福祉の現状を視察する研修を例年実施しておりますが、現地の知識が全くない我々を助けてくれるのが各国にいる研修生の皆さんです。当法人の視察目的、希望施設、滞在期間等を伝えたくえで研修コーディネートをさせていただきました。研修時は現地で視察先・食事・余暇を含め全面的にサポートしてくれ、円滑に研修を行うことができ、研修生の皆さんはとても心強い存在となっています。1度の研修での出会いが数年後にこのようにつながっていることはこの研修に大きな意義を感じております。

ここ数年は新型コロナウイルス感染症の影響でスタディツアーの実施ができていませんが、新型コロナウイルス感染症が終息し再開できること、研修生の皆さんと再会できることを心待ちにしています。

同じくアジア社会福祉従事者研修においても1日も早い再開を願うとともに、新たな研修生との交流ができる機会を楽しみにしています。



理事長宅で職員と一緒にホームパーティーを楽しむアニサさん
(インドネシア・35期)



ニーさん(タイ・36期)と研修センター職員



五十嵐 美奈

社会福祉法人 興望館 地域活動部
国際交流担当

「アジア社会福祉従事者研修と興望館」

興望館で初めて研修生を受け入れたのは、1986年。フィリピンのエリータさんです。その後、数日間の研修や見学も含め、本事業を通じて30名以上のソーシャルワーカーがおいでになっています。

本事業を受け入れるにあたっては、当時、福祉分野の国際交流に尽力されたラリー・トムソン先生や大谷嘉治先生の存在が大きかったようです。ある時、本事業がソーシャルワーカー同士の、顔の見える関係づくりを目的としている、ということを知ることがありました。法人としてこの趣旨に大いに賛同し、受け入れを開始しましたが、このことが興望館の国際交流事業を一気に飛躍させるきっかけともなりました。

1980年代から1990年代前半、興望館では海外の実践から学ぼうという機運がありました。韓国の趙(そう)さん(第9期)、台湾の呉(うー)さん(第11期)など、多くの研修生たちに触発され、職員とボランティアが、それぞれの働き場を見に出かけていきました。この職員旅行にも象徴されるように、本研修は長期にわたって生活丸ごとの受け入れとなるため、個人的なつながりや関心が芽生えます。また、各国の福祉事情や事業内容について実践者の言葉で聞くこと、

自分たちの実践を言語化し見つめなおすこと、そして、若手職員が同世代のワーカーの現地での奮戦を知ることは、大きな学びです。

最近は、インドネシアの研修生がおいでになっています。子ども達にとってもこの出会いはとても大切です。2019年にイマさん(第36期)が第1回施設研修でおいでになりました。学童クラブで、気さくな彼女になついていた小学3年生の女の子が、「どうしてスカーフをかぶっているの? 取って見せて!」と言うので、「イスラム教の女の人は、男の人がいるお外では、髪の毛を見せないんだよ。」と説明すると、「じゃあ、女子トイレに行こう!」と返してきました。何気ないやりとりですが、純粋に異文化の慣習に触れることは、多様性を受け入れる土台になると感じています。

今は対面の活動が困難な毎日ですが、1日も早く、この豊かな交流が再開できることを願っています。



職員とハンドベル活動に参加したマーチャさん
(インドネシア・33期)



保育園児から記念のアルバムを受け取るイマさん
(インドネシア・36期)

2020年度 修了生福祉活動助成事業報告②

本事業は、アジア社会福祉従事者研修修了生が行う社会福祉事業等への助成を通じて、アジアの社会福祉の発展に寄与することを目的に実施しています。前号に引き続き、2020年度助成を行った10事業のうち、3事業の概要について報告いたします。

「西ボゴールの 地滑り災害被害者への対応」

スアルニ（24期・インドネシア）
サクラ財団



サクラ財団では、子どもたちや女性を虐待や暴力などから保護し、正当な権利を得るための活動を行っています。活動地であるボゴールは、年間を通じ雨量が非常に多く、雨期のたびに洪水が起こります。2019年11月末からの雨期に発生した豪雨による洪水と土砂崩れでは、各地で河川が氾濫し、停電による交通機関の遮断、高さ4メートルを超える浸水による死者も発生しました。そこで、本事業では、地滑り災害の被害者である子どもたちや女性を対象に、避難所の開設や心理的・社会的支援、教育支援、地滑り予防の情報提供を行いました。また、2020年3月よりボゴールは新型コロナウイルスのためロックダウンされました。財団では、新型コロナウイルスの影響を受けた子どもたちや保護者、高齢者への支援も行いました。

被災者のニーズを把握するため、まずサクラ財団のソーシャルワーカーが避難所にてニーズ評価を行いました。その結果をサクラ財団のチームで話し合い、適切な支援方法を見つける、あるいは支援機関やサービス提供者につなげました。被災によるトラウマをもつ子どもたちへの心理的・社会的支援は、感情や課題を共有する分かち合いのセッション、リラクゼーションセッション、対応や支援方法等の確認セッション、全セッションを終えてのフィードバックなど段階的に全10回行われました。そのほか、地滑りをいかに防ぐかについての情報を村の全コミュニティに提供しました。

行政と協力した食糧パッケージの配布や、オンライン授業のためのインターネット環境の整備、パンデミックにより家庭内暴力を受けた子どもへの心理的・社会的支援も行いました。



親子への食糧支援



サクラ財団による難民キャンプ

2021年3月の緊急支援

虐待や暴力被害を受ける女性や子どもを保護する施設はインドネシアに少なく、サクラ財団のシェルター事業は行政から一定の理解を得ています。サクラ財団では、保育園運営や食糧販売事業により得た収入をシェルターの運営に充てていました。ところが、新型コロナウイルスのパンデミックにより、どちらの事業も政府から実施を禁止され、シェルター運営費が賄えなくなりました。財団では政府の助成を申請しましたが、助成が下りるのは半年以上先で、そのうえ食費や日常生活費は対象になりません。財団のスタッフは無給で業務にあたりましたが、シェルターで受け入れている女性11名と子ども33名の食費や生活費が賄えないため、全社協に対して緊急の資金支援が要請されました。全社協では国際社会福祉基金委員会の了承を得て、シェルターの維持・運営に必要な費用の6か月相当分として、35,800,000インドネシアルピア（270,182円）を支援しました。



シェルターで生活する女性と子ども

「タイの子どもとその家族を対象とした 危険な移住と人身売買等防止のための教育支援」

ラットジャイ (23期・タイ)

人身売買等防止組織 AAT (Alliance Anti Traffic)



AATは、タイ国内外と地域社会における、女性・女兒への性的搾取を目的とする人身売買に立ち向かうことを使命として活動する団体です。基礎教育を受ける機会のない子どもたちへの教育の支援、子どもやその家族に移住や人身売買の危険性について教育することがこの事業のねらいです。活動地であるミャンマーのシャン州シャウメは、同州北部の紛争により、女性や子どもたちがタイで働くために移住する傾向の強い地域です。AATは、地域のリーダーである僧正と共に、人身売買の危険性や安全に他国へ入るスキルなどの啓蒙キャンペーンを行っています。また、子どもの教育および生活スキルを向上させるためにTKO (Thai Kids Organization) 学校を設立しました。

全社協からの支援により、鉛筆やペンなどの文房具、本や教材、机や椅子などの設備を整えました。2020年7月にTKO学校の事業を開始する予定でしたが、新型コロナウイルスの影響で学校が開校できませんでした。そこで、生徒を年齢ごとの3つのグループに分け、開校まで自宅待機とする、学習のため中心部の僧院に送るなど、グループごとの対応を検討しました。閉校中の代替活動として、パソコン教室を2期にわたり実施しました。その他のスキルを向上させる活動として、Dhamma (仏教における法) についての授業を行い、61人の生徒たちが、運動、瞑想、Dhammaの道徳や伝統の理解、心身の健康等について学びました。



パソコン教室



全社協からの支援で用意した教材や文具

「視聴覚障害者学校の寄宿舎の 修繕による学習環境の向上」

サンジーワ (23期・スリランカ)

センカダガラ視聴覚障害者のための学校協会



所属団体は教育省のもとで視覚障害や聴覚障害のある生徒 (1年生～11年生) のための特別養護学校を運営しています。本事業では、視聴覚障害のある生徒の生活・学習環境を向上させるために、老朽化した寄宿舎の改修を行いました。改修により、生徒が心地よい環境で暮らせるようになるだけでなく、スタッフは生徒たちをより安全にみることができます。

2020年6月から改修を始める予定でしたが、新型コロナウイルスの流行によりスリランカ全体がロックダウンされたため、事業の開始が遅延しました。12月になっても学校の閉鎖は解除されず、工事は2021年1月に着工となりました。2階建て女子寄宿舎の、床の損傷が激しい1階部分を改修することになり、セラミックタイルを敷設しました。女子寄宿舎の1階部分は男子生徒も使用でき、多くの生徒が快適に暮らせるようになりました。

今後も、視覚障害および聴覚障害のある子どもたちが楽しく快適に生活できる環境、充実した教育を行なうための学習環境を構築し、生徒たちの素晴らしい人間性と自尊心を育てていきます。



改修前



改修後



サンジーワ氏と生徒たち

※本事業は、1997 (平成9) 年から毎年実施しており、現在は、公益財団法人日本社会福祉弘済会、公益財団法人毎日新聞東京社会事業団の助成および本会の国際社会福祉基金を原資に助成を実施。2020年度までに、8か国、延べ184団体、総額約5,470万円の助成実績。

国際交流・支援活動にご協力ください

全国社会福祉協議会では、次のようなアジアへの国際交流・支援活動に取り組んでいます。

アジア社会福祉従事者研修 ～日本で学び、絆を結ぶ～

アジアのソーシャルワーカーを日本に招へいし、11カ月間の研修を行っています（現在は休止）。同じ福祉の仲間として、“顔の見える”信頼できる関係づくりを積み重ねてきました。

修了生福祉活動助成事業 ～多様なニーズに向き合う活動を支援～

虐待や搾取に苦しむ女性や子どもへの支援、保健衛生の向上、農作業や小規模な事業による所得創出など修了生の母国での活動を支援します。

ネットワークづくり ～現地の福祉にふれる、修了生と交流する～

各国の福祉事情や実践を学び情報交換するスタディツアーのほか、昨今は修了生とのオンライン交流会を開催しています。

災害時福祉活動支援 ～たすけあいは海をこえて～

アジア地域で大規模な災害が発生した際は、広く日本の福祉関係者に拠金等を呼びかけます。スマトラ沖地震やフィリピン台風等で現地の支援活動を支援しました。

福祉関係者の皆さまにおかれましては、国際交流・支援活動、そしてその財源となる「国際社会福祉基金」へのご協力ご支援をお願い申し上げます。

詳しいご案内は、パンフレットをご参照ください。



(2021年度)国際交流・支援活動会員にご登録いただいた会員の皆さま

ご登録ありがとうございます。お寄せいただきました会費は、国際社会福祉基金への拠金として受け入れ、大切にさせていただきます。

＊2021年12月6日現在ご登録済の法人・個人の方（敬称略）

【法人・組織会員、賛助会員】

小諸青葉福祉会 やまびこ園(長野県)／白皇山保護園(富山県)／足利むつみ会(栃木県)／昴(埼玉県)／ミッドナイトミッションのぞみ会(千葉県)／堺暁福祉会(大阪府)／愛里巣福祉会(石川県)／社友会(兵庫県)／晋栄福祉会(大阪府)／村山苑(東京都)／大阪自彊館(大阪府)／八尾隣保館(大阪府)／夕陽会 本福寺こども園(滋賀県)／吹田みどり福祉会 たちばな保育園(大阪府)／吹田みどり福祉会 藤白台デイサービスセンター(大阪府)／天竜厚生会(静岡県)／くすの樹会(福岡県)／中心会(神奈川県)／クムレ(岡山県)／常盤会(鹿児島県)／徳心会(東京都)／誠信会(静岡県)／神奈川県匡済会(神奈川県)／日本原荘(岡山県)／ふじ福祉会(大阪府)／みなやま福祉会(京都府)／静岡恵明学園(静岡県)／石川県社会福祉協議会(石川県)／恵の園(群馬県)／慈愛会(福岡県)／成光苑(大阪府)／土佐厚生会(高知県)／国際保健支援会(長野県)／大阪府社会福祉協議会(大阪府)／福寿園(愛知県)／芳香会(茨城県)／六親会(千葉県)／あすなろ会(島根県)／成寿会(秋田県)／真宗協会(北海道)／聖徳園(大阪府) ＊以上、社会福祉法人
(公財)鉄道弘済会(東京都)／(一社)社会福祉懇談会(岡山県)

【個人会員】

伊東 安男／小林 大真／田部井 恒雄／栗和田 敏／藤田 勝彦／小牧 博文／下山 當子／品川 卓正／小林 和弘／三上 智代／松下 明／齋藤 靈一／高塚 政生／村上 義孝／友田 直人／高山 科子／花崎 みさ／石井 美奈／小林 佳之／辻村 泰範／辻村 万里子／高橋 紘／富田 洋子 ※その他6名様（本会役員含む）

修了生福祉活動ショートビデオをご覧ください！

全国社会福祉協議会のホームページに、2021年度修了生福祉活動助成事業の取組を紹介するショートビデオをアップしております。コロナ禍で奮闘する修了生の最新の活動をぜひご覧ください。動画は順次アップいたします。



2021年度に助成を行った10名の修了生の事業の動画をご覧ください。

詳しくはこちらからご覧ください ➡

